
SDFS **特殊支援課**

ジョン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SDFS 特殊支援課

【NZコード】

N3608S

【作者名】 ジョン

【あらすじ】

特殊支援課 それは、超巨大企業ユニオンに設立された新部署。構成人数は若手社員5人。主な仕事は雑用。

主な業務である人の負の感情から生まれる【悪鬼】を特殊能力【式神】で討伐したりするわけでもなく、【純血】【混血】

【鬼神】という三つの種族間の争いを調停したりするわけでもなく、特殊支援課は今日も戦線の隅っこで雑用を続ける。

この物語は、そんな雑用係 もとい、特殊支援課の輝かしい日々と正義を貫く姿勢を描いた物語である。

案件1・結成！ 特殊支援課（前書き）

はじめましての方は、はじめまして。
作者のジョンです。

この度、自分のミスにより作品を消したり、投稿できなかつたりと色々な不祥事が重なり、読んでくださっていた方達には申し訳ない気持ちです。

今回投稿するこの作品は、消してしまったMixedの後の時代の話になります。

あれで書ききれなかつた事は今後このSDFSで補完していくたいと思いますので、

今後ともお付き合い頂ければ幸いです。

過去シリーズのキャラが序盤から出ていますが。

これもMixed同様、過去シリーズを読んでいなくとも問題ないようになります。

話を進めていきたいので、ちょこちょこ補足説明とか入れたりする予定です。

社会人になり責任や仕事も増えてきたので。

投稿頻度は低いですが、よろしくお願ひ致します。
月に一話は更新したいなあ、と。

人の悪意より生まれる異形の生物 悪鬼。

日本では古来より式神という特殊な力を用いて悪鬼討伐を生業とした一族が居た。

しかし、人間とは欲深い生き物。式神を使って人間同士までもが殺し合い、その歪んだ意思によつて生まれる悪鬼は多様化し、世界の裏では混沌とした戦いの日々が満ちていた。

そんな古き時代を終えた現代では、人間内で三つの種族が対立し、大きな戦争が起きた。

人間と人間の交配によつて生まれた、純血と呼ばれる種族。

人間と低級悪鬼の交配によつて生まれた、混血と呼ばれる種族。

人間と上級悪鬼の交配によつて生まれた、鬼神と呼ばれる種族。

純血は異形の力を持つ混血を恐れ、混血は弱き純血を蔑み、鬼神は両者から迫害された。

お互いの存在を滅ぼすような戦争は、表向きは平和な世界で蔓延し、永久に殺しあうと思われた

だが、この種族戦争時代は ユニオンという純血、混血、鬼神の共存を目指す組織の台頭によつて、終わりを告げようとしていた。

ユニオンは混血の千島蒼一。純血の牧島郁人。鬼神の天美運命。人でもない鬼神でもない種の榛名神靈と榛名由加。この五人を中心とした組織である。

三人の鬼神が日本を破壊しようとした【神代戦争】。

鬼神集団が世界をやりなおそつとした【神々の黄昏事件】この事件がきっかけとなり発足したユニオンは現在、世界各地へとその行動範囲を広げていた。

そして、現在。

世界最大勢力として大きく成長したユニオンに、一つの新しい部署が誕生した所から、物語は始まる。

S D F S 特殊支援課

自分には大した才能がない。 そう思い始めたのは何時からだつたろうか。

非日常の家に生まれ、非日常の学校を卒業し、非日常の職業に就いたが、自分が力を發揮し、成し遂げた事等無いに等しい。だから、今度の辞令がきた時も、特に気持ちに変化はなく、ああ、また数年間、終わつてみれば普通なんだろうな。という思いしか出てこなかつた。

(日本は、久しぶりだな)

故郷の国に帰る事も。新しい部署も。新しい役職にも大した希望は見出せず、とりあえず、きちんと仕事だけはしようとまず思った。そういう性分なのだ。

今は飛行機の中。周囲が寝静まっているその状況で、みなみこうたろう美波紅太郎は薄明かりの中で辞令を読んでいた。

身長は男性としては平均的。中肉中背だが引き締まつた体。黒髪を短く切り込んだ怜俐な印象を持たせる風貌である。

辞令の下には、かつて所属していた部署の面々からの激励の手紙が幾つか。その中の一つ、上司からの手紙を紅太郎は取り出した。

人生は劇的だ。大いに楽しめ。

短く、それだけの文字が書いてあつた。あの上司らしいといえば上司らしい、と少しだけ笑みを漏らす。

ほんの少しだけだが、自分の先に興味が湧いた。あの上司の言葉には、何故か影響されやすい。

辞令の下の方。次の部署の名前。役職。部下の規模や人数。主幹業務をチェックしていると、

「……ん？ 特殊支援課、第一小隊隊長。……詳細は、後日担当から？」

あまりにも不明瞭な説明だった。そういうえば、上司がとても嬉しそうに辞令を見ていたのを思い出す。

猛烈に、嫌な予感がした。同時に、過去の記憶も蘇ってきた。

「そりいえば、四条課長が笑つてゐる時つて……」

紅太郎が日本に戻るのが嫌になつてきたのと相反するよつに、飛行機はぐんぐんと速度を上げて、日本へと近づいていった。

成田空港に到着し、電車を乗り継ぐ事1時間ばかり。

紅太郎の所属するユニオン本部がある海上都市舞浜経済特区へとたどりついた。

周囲が海に囲まれ、高層ビルが立ち並んでいる未来型都市のよつな外観だ。数年ぶりに見たが、益々の繁栄を見せていた。

駅を降りて、自動で進む道の端に寄りかかり、久しぶりの舞浜を感じるが、

「意外と変わってるようで、変わつてないな」

どう見ても堅気に見えない肉体をしたスース姿の男達。無邪気に談笑している舞浜特区内にある養成学校の生徒達。

紅太郎が居た頃と、あまり変わつていない。自動で進む道も終わり、第三区域と呼ばれるユニーク・オン・オフ本部がある区域へと足を進める。段々と学生達の姿が消え、大人ばかりになつてきた頃、目の前に巨大な建物が見えてきた。

白を基調とした舞浜でも一番大きなビル。これが、ユニーク・オンの総本部だ。見上げると黒髪の男が空中から吊るされているのまで変わつていいない。

「おはようございます。ユニーク・オン海外支援課所属、美波紅太郎です。五月課長をお願いします」

受付に社員証を提示しそう言つと、七階にある第一オフィスに行くように指示された。

紅太郎が居なかつた三年間で見知つた顔は皆本部に居ないようだ、オフィスの中に顔見知りが居なかつた。

人数がとんでもない数なので当然といえば当然だが、少し寂しくも感じる。気を取り直して、エレベーターで七階まで上がり、第一オフィスをノックし、部屋に入る。

「おはようございます」

返事が返つてきた。男の声と女の声が一つずつ。

(まだ若いな……俺より年下みたいだ)

部屋には若い一人の男と女が座っていた。のほほんとした雰囲気の女と、厳格そうな顔をした男。男の方は少年といつてもいい。

「五月課長は?」

「まだおつきになつてないみたいですね!」

紅太郎の問いかけに、女の方が元気よく答えた。男の方も無言で頷く。

「では、課長がいらっしゃる前に自己紹介を済ませておこうか。このままじゃ、気まずいもんな。

俺は、美波紅太郎。24歳だ。つい先日までユニオンの海外支援課に所属していて、アメリカに居た。

皆、今の所年が近そうだし、気楽な感じでいきたいと思つて。肩肘張らずに、接してくれるとありがたい」

ぱちぱちと小さな拍手が一つ。紅太郎が女の方に先を促すと、女は勢いよく立ち上がつた。

背は女性にしては高い部類に入るのだろうか。茶色く染めた髪を後ろで一つに纏めているのが印象的だ。

「えつと、はじめまして。柚下灯^{おずしたあかり}22才です。ユニオンに入つて丁度一年目になりました。

前の部署は、ユニオンの経済課でした! あんまり外に出してもられない仕事だったので、今度の仕事には期待してます! まだ、右も左もよくわかつてない新人ですが、前向きなのが取り柄なので、それで頑張っていきます!」

経済課と聞いて紅太郎は少しだけ驚いた。こんなのはほんとした子があの経済課に居たとは驚きである。

紅太郎にも経済課に所属する人間の知り合いは居るが、誰も彼もこんな雰囲気をもつていなかつた。

曰く「ちょっと経団連脅していくる」とか「アメリカや！ アメリカ様には逆らつちゃいかんのや！」

発言が色々とアレな人間が多かつたと記憶している。

「よひしく、柚下さん」

「気安く灯と呼んでください！ どんとしいです！」

「あ、ああ……。じゃあ、次の子。頼むよ」

紅太郎が最後の厳つい雰囲気の少年に先を促した。少年はすっと立ち上がると、厳つい雰囲気を消し、快活な笑顔を作つた。座つていて気がつかなかつたが、背が高い。紅太郎よりも5センチは高いだろうが、体つきは細い。

「皆さんが優しそうな人で安心しました。ええと……金剛武政と申します。18歳です。

先日、舞浜学園を卒業しました。社会人は初めてですが、一生懸命頑張りたいと思います。

俺の事も気安く、武政って呼んでください。至らない所があつたら、指摘お願いします」

金剛、という名前に紅太郎は驚いた。日本の”家”の中で一番有名な数の十名家と並び立つ、五行という名家集団。

その五行の家の一つが、金剛といつ苗字だ。その苗字を持つてゐるという事は只者ではない。

「えつと……武政でいいかな？」

「あ、はーー！」

「金剛つてのは、アレかな。五行の。そんな君が何でユーロンに？」

「セウです。えつと、親父が豪遊しそうで、実家が破産しちゃったんで、ユーロンに出稼ぎにきたんですよ」

「ハハハ笑いながらとんでもない事をカミングアウトした武政。

紅太郎も言葉に詰まり、灯だけがうんうんと何故か頷く。

そんなこんなで自己紹介も終わり、紅太郎は何だかとんでもない面子だと、内心焦り始めていた。

まず、年長者がいない。課長である五月舞香も、紅太郎より少し年上程度である。これで、本気で仕事が回るのだろうか。

そもそもこの特殊支援課という部署が何をするのかもわからない。

「武ちゃんって凄いことこのお坊ちゃんなんだねー。うん。よくよくみれば育けよそうな顔してるよー」

「ありがとうございます。まあ、もう破産して一家全員行方不明なんすけどねー」

既に打ち解けた雰囲気を出している灯と武政を見て益々不安になつてくる。そのまま無言で待つていると、

部屋のドアが再び開いた。入ってきたのは、機嫌悪そうな呪え煙草のスースイ姿の女。もう一人は、

黒髪をショートに切りそろえた少女だつた。前者の方は見覚えがある、この課の新課長に就任する、五月舞香だ。

「おはよーっす。皆揃つてるみたいね。あ、こいつはヒオ。あんたらの最後の仲間だかんね」

「はじめまして。よろしくお願ひします」

舞香に促されてヒオと呼ばれた少女がペコリと頭を下げた。きちんととした礼だ。相当躊躇られているのがわかる。

だが、灯と武政よりも明らかに年下だ。ここはもつしかしたら保育課で、自分は保育士にでもされるのかかもしれない。

（いかん。……変な汗が出てきた）

そんな紅太郎の気持ちをしつてか知らずか、五月舞香は氣だるげに煙草を灰皿に捨て、

「んじゃ。説明しようか。この特務支援部について。トイレはいい？ ちよつと長くなるかもよ」

全員が無言で平氣の意思を示すと、舞香は説明を始めた。

「えーっとね。この特殊支援課つてのは残念ながら試験的な課なのね。つまりは、長期的な仕事をするわけじゃないのよ。

今のコニオンつてのは色々面倒くさくてさ。人や課が増えすぎて、仕事の縄張り争いとか各課の勢力図とか色々面倒なのよ。

こん中でそれをわかつてるのは紅太郎ぐらいかな。ま、アンタもずっと海外に居たからいまいちピンとは」ないでしょ「けど」

「残念ながらそうですね。同期からは話は聞いた事がありますけど、実情までは」

「それでいいのよ。そういう面子を選んだんだから」

「……は？」

「簡単に仕事内容を説明すると。他の課の手伝い係つて感じかな。どつかの課から依頼が回つてくるから。

それをあんたらはきつちりこなせばいいってわけ。大きくて難しい仕事は、その課の連中がやるからわ。

あんたらがする仕事なんかお使い程度のもんつてわけよ。ただ、しんどい仕事だからね。依頼期間中以外は、何をしていてもいいよ。自由行動つてわけ。勿論、犯罪は駄目だけどさ。バレない自信があるならいいけど

（よくないだる……）

紅太郎は心の中だけでそう呟くと、舞香に向き直り、

「概要はわかりました。そのような仕事なら私を始め、若手が集められたというのも納得できます。他の課に顔や能力を売り込む事が出来るので、決して無駄な年数の仕事という事でもなさそうです。ですが、一つ腑に落ちません。五月課長、その点を深くお聞きして もよろしくでしょつか」

「何だよ紅太郎。昔と違つて余所余所しい口調じやない。前にも言つたけど、この仕事はしんどいからさ。

もつちよつと軽く構えててもいいよ。言葉遣いや態度だつて私をムカつかせない程度なら全然平氣だしね」

舞香の言葉に紅太郎は一度咳払いをし、了解を示す意味でつづいたネクタイを緩めた。

「では……舞香さん。俺はびうしても腑に落ちないんですよ。俺の知つてゐる舞香さんなら、絶対こんな部署の課長になつたりしない。神樂さんに押し付けてトンズラかますのが俺の知つてゐる舞香さんです。

何か、裏があるのでしきう。それを聞かなくちゃ、安心して仕事ができない。この子達も可哀想だ」

かなり生意氣な言い方になつてしまつたが、舞香は氣にした風もなく、機嫌よさそうに笑つた。

「鋭くなつたね、紅太郎。これは後で個人個人にこつそり吹き込もうと思つたんだけどねえ」

「一度舞香さんと関われば誰だつてそつなりますよ」

「ははは。言ひじやん。さて、じゃあ説明しちゃおひ。この特殊支援課の本当の目的をね。

……アンタらは仕事上。他の部署のオフィスにも入れるし、他の部署の人間とも関われる。

ここまで言えば大体わかるかな。他部署の機密情報や裏情報を手に入れたら、私に報告しなさい！」

灯や武政が動搖したのがわかる。紅太郎はあまり驚かなかつた。ヒオは微動だにしない。

「仕事は適当で構わないわ！ つるせえ課長が居たら私に言ひなさい。闇討ちしてやるから。

その代わり、情報収集だけは怠らない事。どんな些細な事でもいい。面白そうな事があつたら、私に報告しなさい！

ボーナスたんまり出すわよ！ こゝ、基本給から上は完全歩合制だからね！」

とても良い笑顔で五月舞香は堂々と言ひのけた。自分が悪い事をしてるなんてカケラも思つていない。そんな顔をしてこる。すると、灯が手を上げた。ああ見えて常識がありそうな子だ。この悪党に正論を振りかざしてくれるかもしれない。

そんな淡い期待をこめて、紅太郎は灯の方を向いた。

「そ、それは悪い事だと思つんですけど…」

「悪い事じゃないわ。ユニークは今腐敗が始まつてゐる。各課が権力を持ちすぎているから、不正が行われていても関与できない。そこで立ち上がるのが私たちよ。ユニークの正義のヒーローとして、今日から、貴方達がユニークを救つのよ！」

「え…………あ、そ、それもそうですね！ 武ちゃん！ 私たち、今日から一緒に頑張るうね！ ヒオちゃんも紅太郎さんも…！」

（それでいいのか……）

一瞬で陥落した灯に苦笑いを送る。灯もとても良い笑顔を返してきた。間違いなく良い子だ。こんな課に居るべきじゃない。

武政は武政で「ボーナスいっぱいであるならいいなあ」と呑気に笑つてゐる。ヒオの様子を伺つと、こゝちを見ていた。目を逸らす。

そして、舞香が拳を突き上げ、

「よつし。とりあえず、隊長は紅太郎って事でいいわね。こいつ、
こいつ見て結構強いのよ」

「はい！ 紅太郎さんで問題ないです！」

「俺もつす！」

灯と武政も勢いに乗せられて拳を突き上げながら言った。だが、

「私は賛成できません」

ヒオだけが反対の意思を示す。紅太郎がヒオを見ると

その眼

は鮮やかな緋色に染まり、挑発的な意思を浮かべていた。

案件2・緋眼の少女（前書き）

今日中に四話までいきたいなあ。

案件2・緋眼の少女

「君の意見を聞こえつか」

ヒオの賛成できないといつ意見に対し、紅太郎は冷静に言葉を返した。

特に怒りも感じていない。正直言えば、自分だって年功序列で隊長を決められるのは納得できない。

そんな紅太郎の反応に一瞬ヒオはたじろぎ、だがすぐに気を取り直して言葉を続けた。

「私は、自分より弱い生き物に判断を委ねる等、命の無駄遣いをするつもりはありません」

「成る程。君には、俺は君より弱っているように見えるんだね」

「 맞습니다. ……」この隊は私の指揮下に入つて貰います。」

「お皿葉を返すようだけど、俺だって君のよつな子供に判断を委ねるのは少し躊躇つむ」

子供、といつ言葉にヒオが反応したのがわかつた。舞香は楽しそうに状況を静観していたが、

「よし。じゃあ後は任せるよ。自分達の問題は自分達で解決する事。じゃ、私これから見たい𠂇ドリあるんで」

それだけ言つと、たつたと部屋を出て行ってしまった。相変わらずだ、と紅太郎だけが思い、舞香という人間をまだ知らない他の面子はぽかんと口を開けて、放心状態になつてしまつたようだつた。

とりあえず、と氣を取り直して紅太郎を咳払いをし、

「こいつなつたら、勝負するしかないよな」

「ええ。式神戦と行きましょう。恨みつこなしで。貴方に負けたら、私は素直に従います」

式神とは悪鬼に対抗する為に生み出された古来より伝わる力だ。己の存在の根源へと意思を繋げ、

反意を利用して、攻撃手段として現世に顕現させたものである。俗に【反する力】と呼ばれる種類の一つである。

近年ユニオンではこの式神と十文字家に伝わる【魔具】という能力を合体させ、【リアクター】と呼ばれる武装の配備も進めていた。

「俺もそいつするよ。この若さで俺を超えるなら本当に大したものだ」

正直に言えば少しだけ変わつてほしい。とも思つ。だが、後輩の指導も一応年長者の使命だつと判断し、何も言わない。

「じゃあ、模擬戦場を借りようか。今日けでこの部署も配置転換で忙しそうだから、きっと借りると思つ」

「……はい。異論なしです」

「灯と武政も見学するといい。これから式神を使う機会もあるかも
しないからな。仲間の能力は知つておいて損はない」

状況を見守つていた灯と武政も頷き、紅太郎は全員を引き連れて
オフィスを後にした。

本部の別棟には訓練用の模擬施設がある。十文字家の特殊能力魔
具を使用し、外観の数百倍の広さを持つ建物だ。

ありとあらゆる状況を想定した訓練も出来る上に、娯楽としての
場としても使える多岐の用途がある施設だ。

ユニークの人間なら誰でも使用出来るのが、今日は日が日なので人影は紅太郎達以外にはないようだつた。

男女別の更衣室に別れ、紅太郎と武政は一人で話し込んでいた。

「あの。紅太郎さん。あのヒオつて子。やっぱり、緋眼使い何ですかね？」

「あの眼はそうかもな。緋眼使いとはやりあつた経験があるから、大丈夫だと思うけど」

「凄いなあ。緋眼の一族つて皆アホみたいに強いって聞いてましたけど……」

「俺がやりあつた時は向こう、かなり酔つ払つてたからなあ。ま、とりあえず強ければヒオに隊長を譲るよ」

緋眼という能力を持つ一族はユニークの中でも有名だ。ユニークのトップがまず緋眼使いであり、

かつて世界を救つた英雄でもある。ヒオもその一族の【秋月】【八神】【千島】といつたどこかの家の所属なのだろう。

あの一族は割りと人間が出来ているのが多いので、泣かしても大丈夫かな。と紅太郎は戦いとはあまり関係のない事を考えた。

つまりは、言葉とは裏腹に負ける気など微塵もなかつた。

「よし。じゃあ行くかな。武政も俺が弱いと思つたら、何時でも挑戦してきていいんだからな」

笑いながら紅太郎は言つたが、内心武政には負けるんじやないかという不安が強い。

もし、本当に金剛の一族ならば相性的に勝つのはかなり困難だか

らだ。当の本人はまだ気づいていないようだが。

鉄板入りの馴染んだ戦闘服のブーツを調整し、紅太郎は更衣室を出て、広間へと向かつた。

「遅いです。男性が着替えに時間をかけるなんてみつともない！」

「君の方もまだ準備が終わってないみたいだけじ？」

「ぐ……！」

灯が戦闘の邪魔にならないようにヒオの髪を纏めていた。灯には強く言いにいくのか、ヒオは黙つてされるがままである。

「はい。ヒオちゃん。出来たよ

「……ありがとうございます」

「見てみてー！ 紅太郎さんに武けやん！ ヒオちゃん可愛いですよ！」

「はつは。可愛い可愛い」

紅太郎が半笑いで言うと、ヒオは顔を真っ赤にして「馬鹿にしてるんですか！」と怒鳴つた。

チラリと後ろを向き、灯が完全に離れたのを確認すると、ヒオから膨大な式神の気配が溢れ出した。

あれ程の大口を叩くのだ。かなりの自信があるのは予想できたが、流石にこれは紅太郎も想定外だった。

それと同時に、灯が近くに居ない事を確認した点から、心根は優しい子なんだと、何だか紅太郎も優しい気持ちになってきた。

「出できなさい！ 炎帝！」

ヒオの周囲に、凄まじい炎が顕現した。荒れ狂つてゐるよう外観は見えるが、洗練されており、無駄がない。紅太郎も油断していると危険そうなので、

「活刃」

式神の名前を呼び、顕現させた。何の装飾もない刀が紅太郎の右腕に握られ、白いオーラが紅太郎の体を包む。活刃の能力はシンプルだ。防御効果のあるオーラの発生に、身体能力の強化。それだけ。

紅太郎の式神についてある程度読めたのか、ヒオの顔に余裕の笑みが表れた。あの若さであれだけの力を持つば当然なのかもしれない。紅太郎は軽くステップを踏み、リラックスした体勢をとる。

「じゃあ、はじめようか」

「ええ。申し訳ないんですけど、少し期待はずれでしたね！」

開始の言葉と同時に、ヒオは炎を広範囲に広げて膨大な炎を放つた。ヒオの炎は特殊な炎だ。

質量を持ち、それ以外は全く炎と同じだからタチが悪い。ステージ全体が質量を持った炎に破壊され、瓦礫が燃えていく。全く手加減せずに撃つた。この程度で終わるようではどの道意味がない。と、同時、ヒオの首筋に冷たい感触。

「広範囲攻撃は便利な反面、相手を見失い易い。対人戦で使うと、

「…」のように足元をすくわれるよ」

ヒオの首筋に背後から、紅太郎の式神の剣先が突きつけられていた。同時に、ヒオが高速で移動し、息を弾ませて距離をとる。

「なつ……！」

「油断しただけかな？ 戦場なら、確實に君は死んでいた」

「……つー！」

炎の槍を練り上げ、紅太郎目掛けて放つ。数十本の燃え盛る槍はあらゆる角度から紅太郎を狙うが、

「精度が甘い！」

紅太郎は軽くステップを踏みながら移動し、最低限の動きだけで炎の槍をかわした。掠つただけで大火傷の炎を全く恐れていない。

「言つておくぞ、死ぬのが一番恐ろしいんだ。死なない程度の攻撃なら、恐れは克服できる」

「つるさあああい！」

今度はヒオが高速で移動してきた。炎の剣を両手に構え、紅太郎へと遅いかかかる。ヒオの眼は緋色に染まっていた。

緋眼の能力は世界の動きを遅く見れる能力だ。その状態のみ、肉体が活性化し、感覚的には通常のように動ける。

即ち、実世界では高速。ヒオの嵐のような一撃を、ステップで左右後ろに避けながら、活刃の切つ先だけで全て勢いを殺していく。

「何で……っ！ 式神はこっちのが上なのにー。」

「今度はこちから行くぞー！」

ヒオの片手の剣を弾き飛ばし、今度は紅太郎が攻撃に回った。だが、流石緋眼というべきか、紅太郎の剣筋は全て見切られている。これが緋眼使いの一番厄介な所なんだよなー、と紅太郎は内心毒づき、大きなモーションの突きを一撃。

ヒオはそれを見逃さず、避けてカウンターの一撃を見舞おうとして、気づいた。紅太郎の左手から石が投げられていたのだ。こちらの目を潰す算段なのだろうと判断し、ほくそ笑む。緋眼さえ潰されなければ、長期戦ではこちらが有利だからだ。

突きは避けた。後は投石を避けるだけ、と思つていると、

「緋眼使いは、常に死角に気を配れ！」

直後、わき腹に激痛。紅太郎の右のブーツがめり込んでいた。無理矢理に入れ込んだ一撃だが、驚異的なバランスで

紅太郎は転倒せず、回転して体勢を立て直し、ヒオは大きく吹き飛ばされて、床に叩きつけられた。

ゲホゲホと咳き込み、それでもヒオは怒りと共に立ち上がり、

「何で……！ 何で、そんな弱そうな式神で、純血の貴方なんかに

……！」

その言葉に紅太郎は笑顔で返した。

「こ」の時間最後の教えた。ヒオ。相手は、最後まで切り札を持つているという意識で挑め！

その言葉と共に紅太郎の姿が一瞬消え、次の瞬間には接近した紅太郎により、刃を目のまん前で寸止めされていた。

「あ……」

「俺の勝ちだ。今後ともよろしくな。八神緋緒ちゃんやがみひお」

彼女の最大の過信は、紅太郎を能力を持たないただの純血だと思っていた事。紅太郎もあえて隠していたのだ。そのまま切つ先を数ミリ動かしただけで、

「な。……ん。で。……「つ。」「つ。」「うわあああああああああああああん」

ヒオ　　八神緋緒のそれまで張つていた虚勢が消えて、大粒の涙を零すと、凄まじい速度で走り去つていった。

流石にやりすぎたかな、と紅太郎は反省し始めた。本名も外れるの覚悟で言つてみたが、図星だつたらしい。

「紅太郎さん。駄目ですよ。ヒオちゃんだつて、強がつているけどまだ子供なんですから！」

いきなり大人ばかりの部署に來たから、子供だからつて馬鹿にされないように、あの子はあの子なりに一生懸命だつたみたいですよ」

「……ああ、すまん。明日來たら謝つておくよ。そうだよなあ、ちよつと俺が大人気なかつた」

「つーか、紅太郎さん。何である子が八神の子だつてわかつたんですか？」

灯に怒られ、武政に疑問を持たれ大忙しだなど何処か人事のよう
に思えてしまうが、現実は続く。

「あの子の式神の名前、どつかで聞いた事あるなーって思つたら、
さつき話した昔戦つた

緋眼使いの人と同じだつたなつて思い出したんだ。で、確かその人
娘産まれたつて言つてたから、カマかけたら正解。

あの子はハ神の直系も直系。前当主、ハ神正宗の実娘で、現当主、
やがみまさむねハ神時雨やがみしぐれの妹だよ。年離れてるからいまいちピンとこなかつた

はあ、と何だかわかつたようなわかつてないような反応を示す灯
と武政。これで、隊長に無事就任してしまつた。
なつてしまつた以上、仕事はきちんとやらなければ性分に合わな
い。という事で、

「それじゃ、オフィスに戻つて掃除や雑務をこなそーか。どうせ今
日はもう仕事にならんだろう」

隊長らしく一人の仲間に提案し、少しだけ照れくさそうに笑つた。

翌日。少し気が重い感じで昨晩宿泊したホテルから、ユニーク本部へ向かっていると。

「あ

「あ

「あ

「灯、武政とばつたりあった。特に支障もないのに、雑談しながら三人で本部へと向かう。

「緋緒ちゃん。来ますかね？」

「来てほしいというのが本音だ。来なかつたら、仕事終わりにでも八神の家を訪ねてみるよ。幸い、知らない仲じやない」

「あの八神の家に……。紅太郎さん。流石つす

じつやう昨日の一件で随分と後輩組には買いかぶられてしまつた
よつである。いづれ訂正しようとした決め、
とりあえず現状の緋緒の問題をじうじかしようとして、考ながらオ
フィスに辿り着くと、

「先輩方、おはよつゝぞりますー。」

割烹着を着た八神緋緒が居た。昨日掃除をした時よりも格段に部
屋が綺麗になつていていた。何だこれ。何が起きた。

といつよつに、流石の紅太郎も動搖し、言葉に詰まつていて緋
緒がとことこ田の前にまでやつてきた。

「昨日は大変申し訳あつませんでした。私の完敗です。生意氣な態
度や発言を改めて謝罪致します」

「いや、謝る事はない。俺の方こそ悪かつた。訓練とはいえ、少し
やつすぐた」

「とんでもないやつこません。今日からじう指導の方をよろしくお願ひし
ます。師匠だけでなく、灯先輩と武政先輩もー。」

ああ、やつぱり根は良い子なんだなあと想いつつ、師匠は勘弁し
てほしいと口には出せない紅太郎。

田を輝かさせて師匠と慕つてくれる小さな子供に、師匠なんて呼
ぶなともまた言い難い。とりあえず、暫くは保留とし。

先延ばしにするのはこれまた悪い癖だな、と悩んでくると、死に
そうな顔の五月舞香が現れた。

「あひやあ……掃除しちゃつたかあ。うん。」免ね。あんたらのオ

「フィス」に「じやないんだ。」ここに住所と指示書置いとくから。今日は一日、そこへの引越しをお願いね。舞香さんは一日酔いなんで、これから有給とるんでしょうか」「へい

酒臭い匂いと無常な指示書だけを残し、舞香は去っていく。後には、固まつたままの四人だけが残された。

案件3・特殊支援課初出動（前書き）

仕事が忙しかったんで遅れに遅れました。
次回は6月3日に更新します。

案件3・特殊支援課初出動

案件3：特殊支援課、初出動！

「暇だ……」

美波紅太郎は低い声で誰に語りかけるわけでもなく、そう呟いた。
この特殊支援課に配属されて四日目。上司である五月舞香の指示
に従い、特殊支援課のオフィスは街中の雑居ビルに移っていた。
三階建てのそこそこ綺麗なビルだ。一階がオフィス。三階がこの
課の人間が住む部屋というように割り振られており。

一昨日、引越しを全て終え、昨日からやあ業務開始だと意気込んでみれば、

「今日は仕事くるといいつすけどねえ」

紅太郎の前の机に座つて新聞を読む金剛武政も、暇そうにそう返事をした。緋緒と灯にはコーヒー や雑貨を買いに行つて貰つている。
このように、いざ業務開始となつても依頼がこなければ仕事がな

い。何処の課も新体制になつたばかりで忙しいとはい、

流石にこれでは時間を持て余す。自分はいいが、武政や灯や緋緒の為にならない。若いうちから暇を持て余すのはよくないからだ。

「新聞に何か変わった事は載つてないか？ もしかしたら、何かの手伝いがくるかもしない」

「んー……。特には。今日の一面は舞浜学園の入学式で、早速爆発騒ぎがあつたぐらいですかね」

「相変わらずだな、あの学校は……」

「俺らの世代もほぼ毎年なんかやつてましたよ。会長がもの凄い馬鹿な人だつたんで」

「あの学校の生徒会長はまともな人間が就任した事がないからな。伝統だ」

自分の友人で生徒会長だった人間の事を思い出し、少し嫌な思い出が蘇ってきた紅太郎はげんなりとした顔を作った。

「紅太郎さんは生徒会役員とかやつてたんですか？」

「高等部一年の時、会計をやつていた。友人が生徒会長になつたんで、無理やり誘われてな」

「へえ……。やっぱり紅太郎さんは凄いなあ」

「（）四日ほどで随分武政とは打ち解けてきたと紅太郎は感じていた。灯と緋緒との関係も悪くはない。

全員に崇められているのは後々何とかしたいと思つてゐるが、各員の得意な事も随分とわかつてゐた。

武政はパソコンや機械関係に強く、オフィスの全パソコンの設定やネットワークも全て武政が構築したのだ。

「ただいま戻りましたー」

すると、元気な声が響いて買い物袋を抱えた緋緒がオフィスに入ってきた。武政は朗らかな笑顔で立ち上がり、

「あ、武政先輩は座つていて結構ですよ」

「いやいや。荷物重いっしょ。手伝ひみ」

「すいません。ありがとうございます」

緋緒の荷物を受け取り、簡易キッチンの所まで持つていた。緋緒も随分と武政や灯とも打ち解けてきたようだつた。

「武政先輩はお茶。師匠はコーヒーでよろしいですか？」

「ああ。すまないな」

緋緒はこの事務所の家事全般を引き受けさせていた。コーヒーの淹れ方。お茶の淹れ方。どれをとっても完璧。

相当厳しく躰られたのか、掃除も隅々まで綺麗にするし、これ以上ない程有能な子だ。男所帯にずっと

いた紅太郎はこの毎日綺麗に整頓された環境が新鮮でしようがない。黙つてもコーヒーが出てくるのも有難い。

「灯さんばいじうしたの？」

「灯先輩は、食材を一つ買い忘れたらしい。すぐ戻ると言つてしまつたけど」

「ああ、そろそろお昼だもんね」

武政と緋緒がそんな会話をしていると、元気にドアが開かれ、満面の笑みの灯がオフィスに入ってきた。

「ただいまです。いやあ、岩塩を用意するのを忘れてました。これがあるとないとじり大きな違いがあるんですね」

そして、灯の最大の才能は料理だった。食事に対して並々ならぬ情熱があるらしく灯の料理は絶品だった。

この雑居ビルで暮らしている以上、食事は基本的に全員でとることにしていた。朝昼おやつ晩と灯が用意するようになつた。いつもしてスタートした特殊支援課だが、想像以上にいい環境だ。各員の長所がとても生きている。仕事以外でだが。

「灯さん。今田のお昼はなんですか？」

「昨日の残りの牛肉を使って、中華風炒めものにしようかなーって」

「わかりました。では、私はお米を炊きます」

「緋緒ちゃんは座つてていよいよ掃除とかやつてくれたしね。料理ぐらい何もできない私がやらないと」

灯もとてもいい子だ。だが、その言葉は紅太郎の胸に大きく压し

掛かった。そう、紅太郎だけ何の役にも立つていない。

オフィスの設備の設置は武政が。維持管理は緋緒が。食事は灯が。仕事がないので、紅太郎に出来る事は何もない。精精、

「緋緒。もうわき腹は平氣か？」

「はい！ もう湿布もとれましたし、あれはとても良い勉強になりました」

「緋眼使いと一度戦った人間は、死角を狙うようになる。逆にいえば、お前がわざと死角を作れば敵はそこを攻撃してくる可能性が高い。そうすれば、それを利用してのカウンターも可能だ。

俺はそうやって、お前のお母さんに左腕を持つてかれそうになった。そういう事も考えて訓練するといい」

「成る程。流石師匠です！ お母様も師匠についていけば間違いないと言つてました！」

こうして少しは身になりそうな話をしてやる事、後は各部署の知人に挨拶しにいく際に紹介してやるぐらいだ。

この課が解散しても、顔見知りが居れば他の部署に行つても少しはやりやすいだろう。それぐらいしか出来ない。

自分の無能さに呆れ、どうにか仕事では役に立とうと考えていると、オフィスの戸が開いて、仏頂面の舞香が入ってきた。

昔から舞香を見てきた紅太郎にはすぐにわかつた。……この顔は確実に機嫌が悪い。そう判断し、そつがない挨拶で迎えた。

「おはようございます」

「……おはよ。何なの紅太郎。田つきが氣に入らないわ

(どひしきつてんだよ……)

ハツ当たりの標的にされてしまったようだつた。なほ、正面から打ち合ひをしてやうとした氣になり、

「「」機嫌ななめですね、課長。また畠山で空振りだつたんですか？」

「ははは。またつて何よアンタ。首の骨へし折るわよ

全く感情のこもつていらない笑い声。灯達が何事かと怯えているが、ここの程度で法えていては舞番とは付き合えない。

「すいません。仕事で何かあつたんですか？ 見てのとおり、こちらは開店休業中なんですがね」

「……さつき全体会議があつてさ。千島の田那の長つたらしこくどう文句からよーやく開放されたとゆつたら、あいつよあいつ。戦闘三課の神崎森羅。あいつに捕まつちやつてさ。新部署では悪い事してないかだの。今度仕事頼むかもだの。この私に上から田線で色々言つてきやがつて。昔、あいつの部下だつた時に乱闘起こしたのをまだ根に持つてゐるんだわ、さつと

「総合的に見て課長が悪いですね。仕事くれるならいいじゃないですか」

「戦闘三課に重要な情報なんてあるわけないぢやない！ あいつらがやつてるのつて、ヤクザとかそこいらのチンピラ相手なのよ！

警察や自衛隊と癒着しまくつてたわ。」こちらの法律違反を見逃す代わりに、あいつらの仕事手伝つてるし、情報価値が低いのよー。」

「まあまあ落ち着いて。それで世界の安定が保てるならいいじゃないですか」

「世界が安定しても、私の地位が安定しないじゃないー。」この課で集めた情報で邪魔者潰しまくつて昇進しようと思つてたのにー。」

一頻り文句を言い続けると、ようやく気が済んだようで舞香は煙草を取り出してぷかぷかと吸い始めた。

「落ち着きました?」

「うん。まあ、私も少し言ひ過ぎたわ。とりあえず、戦闘一課から一件依頼が来たわよ」

「戦闘一課から……？」

舞香が一枚の紙を机に置いた。紅太郎はそれを受け取り、ざつと内容を眺め、

「中級悪鬼の討伐……。何で俺達がこんな事を? 戦闘一課内の処理で事足りると思つんですけど……」

悪鬼とは人間の負の感情から生まれる化け物の総称だ。人の感情によつて様々なタイプの悪鬼が生まれるので、

古来より悪霊や妖怪として伝わってきたものの正体である。力の強さによつて上級、中級等ランク分けされるのが一般的だ。

上級になればなるほど強大な力を持ち、知能も高い。そして上級

悪鬼と人間の交配によって生まれるのが、鬼神という種族である。

「戦闘一課、今年凄い忙しいらしいわ。何だか問題児が色々と入つたりしてきたみたいで。コア持ちの悪鬼も生まれたらしいし。だから、こんな小さな依頼には構つてられないって事よ。一課の課長が私に泣きついてきたわ。うん。いい気味！」

「……灯達の実戦投入にはうつてつけとこいつですか。舞香さんも少しは考えてるんですね」

「うう見えて、部下と友達と兄は大事にするのよ。舞香さんはね。じゃ、後は任せたわよ」

舞香はそれだけ言つと、席を立つてちょいビタイングよく完成した灯の昼食を食べに向かつた。

灯の作つた昼食を食べて一杯お茶を飲んだらそそくさと消えた舞香を半眼で見つつ、紅太郎達は午後の仕事の準備を始めた。

ユニオンから支給された戦闘服にそれぞれ着替え、装備を整える。

紅太郎は昔から使つていた戦闘服を、灯達は新品の戦闘服を。

意思一つで防御結界を張る事の出来る、十文字家の能力が使われた特別製だ。

「最近の戦闘服は素材が随分と軽いんだな。俺達の世代は自分が動きやすいよう、幾つかパーツを外して使うのが当たり前だつたんだが」

自分の戦闘服と灯達の戦闘服を見比べて唸る紅太郎。ここ数年の中にまた技術の革新が進んだという事を実感した。

十文字家の【魔具】という能力と、舞浜特区の科学力の融合は、舞浜とそれ以外ではかなりの差がついてしまつてている事は聞いていた。

他国の軍よりも、この日本の軍よりもずっと強力な装備を誇るユニオンというこの組織は、どこまでの影響力を持つ程までいったのだろうか。

自分の装備を見つめながら、そんな事を考えてしまい。紅太郎は頭を振つて、考えを打ち消した。

「……それじゃあ、ミーティングを始めようか。依頼は簡単。悪鬼の討伐だ。ユニークは今、世界の調停が主な任務になつていいけど。この東京、神奈川、千葉地区の悪鬼討伐は基本的にユニークがやつていい。後の地域は、十名家やら五行家や、各地域毎の家がやってくれてるんだ。

式神つてもんは元々、悪鬼を倒す為の力なんだからな。今はこうして人間同士が戦うつてのが主流になつてるけど、これが正しい使い方だ。

氣をつける事は一つ。この悪鬼は大した事ないが、他勢力もこの悪鬼討伐を狙つてるかもしだ。人によつては襲いかかつてくるので、その際は各自で殲滅する事」

そう、淡々と説明を終えると灯が手を上げた。

「あの、各自殲滅という事は、場合によつては殺すという事でしょうか？」

「その辺りは個人の裁量に任せたい。俺は無闇な殺しは趣味じゃないから、敵が大人しく投降すれば命はあまりとらない。だが、確実にこちらの命を取りに来たり、強力な式神使いだった場合は躊躇うな。やうなきや、やられるぞ」

少し厳しい口調になつてしまつたが仕方がない。これからやる事は下手すれば実戦もあり得る。

誰かの判断ミスで全員が死ぬなんて事もあるのだ。しかし、ずっと経済課に居た灯には少し荷が重いかも知れないとも思う。緋緒と武政は名家の出身だ。その辺りは心得てるようで何も言わ

ない。だが、灯だけは違う。経歴を見たが、本当に数年前まではただの一般人だったのだ。だから、と紅太郎は一度笑みを作り、

「灯。不安か？」

「……はい。ですが、戦えないわけではないです。私だってユニオンに入った時に、覚悟は決めましたから」

「そうか。なら、自分に出来る精一杯まで常にやれ。後の事は俺に任せろ。これでも、上司だからな。責任は全部持つてやる」

そう言つと灯が少しだけ救われたように笑つた。少し照れくさくなつた紅太郎は、

とつと話を進めようと次はターゲットの悪鬼の話を始める。

「目標は中級悪鬼に区分される、鬼型の悪鬼だ。巨大な鎧を持つているらしいので気をつける事。わかつたか？」

はい、という全員の返事を聞くと、紅太郎は満足そうに笑いユニオン特製の装甲車へと乗り込んだ。

それから10時間後。打ち合わせと待機時間を置いて、日付が変わった辺り。

紅太郎達は暗闇の中を懐中電灯を持って歩いていた。今居る場所は東京の地下。

地下鉄が走っている線路を、四人で慎重に、だが足早に歩いていく。ここが、今回の悪鬼が出現する場所なのだ。

「作業員がもう四人も食われている。相当凶暴な悪鬼だ。それでいて、知能もそこそこ高いらしい。見てみる」

紅太郎が暗闇の中の一部分をライトで照らした。そこには点々と血の後が複数。そして、壁際には大きな血の跡が見えた。

「血の傍にへこんだ足跡みたいなものがある。しかもこの数。複数だな。連携をとつて、壁際まで作業員を追い込んで食つたらしい」

「うええ。ぐろいなあ……」

「そして更に」

と紅太郎が続けようとした瞬間。大気を何かが切り裂く様な音が聞こえた。次に、鈍い金属音。

灯は見た。自分の足元に、巨大な鉈が落ちているのを。横を見ると紅太郎と緋緒は既に身構えており、

武政は右手を空中に掲げたままの体勢でじっと闇の奥を見据えていた。

「武政先輩。大丈夫ですか？」

緋緒が心配そうな口調で、だが武政の方は見ずに言つた。どうやら武政が鉈をはじいたらしかつた。

「平気平気。俺の体、ちょっと特殊でね。金属は絶対に傷つける事が出来ないんだ」

武政の家。金剛家は五行の金を司る神と契約した一族だ。その特性はこの世界のあらゆる金属の操作と無効化。

金属は武政を傷つける事は出来ず、武政の意のままにその性質を変質させる事が出来るのだ。

だが、金剛家全ての人間がこの能力を使えるわけではなく、色々と限定される。力を受け継いだ人間と、その子供のみ。

力を受けついた者は子供が生まれれば、その能力を全て子供に持つていかれる。生まれた子供が複数なら、

その全て全員に金の力は受け継がれるが、子供が成人を迎える頃に力の食い合いが始まり、最終的な所有者は一人になるのだ。

「だから言つたろ。俺は武政には勝てないかもつてな」

「いやいや。紅太郎さんの体術ハンパないじゃないですか。俺なんかまだまだ未熟で……」

なははと笑つて頭をかく武政。紅太郎には直感的にわかつてていた。武政は明らかに力を出し惜しみしている。

今の攻撃だつて、自分が反応するよりもほんのコソマ数秒早く武政の方が早く反応していたのがわかつたからだ。

それだけに強烈な攻撃だつたのだ。思わず紅太郎も本気を出しかけた程に。

「これでわかつたな。敵は強敵だ。各人気を引き締めろ」

無言で頷く灯達。再び鉈が投げつけられた方へと歩みを進めていく。脇道に入り暫く歩いていくと、広い空間に出了。古い列車が放置されている。何かの保管場所のようだ。

「血」

「の匂いですね……！」

緋緒がその言葉と共に炎を放出した。暗闇が光に照らされ、紅太郎も動いた。何時の間にか鬼が鉈を振りかぶつて背後に接近していたのだ。予備動作もなく、虚空から式神を引き抜き、回転するようにして鬼の上半身と下半身を真つ二つに裂いた。同時に、咆哮が地下を埋め尽くし、無数の鬼達があらゆる場所から飛び出してきた。

「灯！」

紅太郎が怒鳴ると同時に、状況についていけず硬直していた灯の体が動いた。式神を召還し、

「氣象長！」

灯が虚空から引き抜いたのは一本の杖だ。灯が式神の名前を呼ぶと同時に、凄まじい雷が迸り、鬼へと襲い掛かった。

本物の雷と全く同じレベルの雷撃を受けた鬼は何の前触れもなく火花を上げて吹っ飛び、壁に当たって動かなくなる。

灯の式神【氣象長】は天候を再現する式神だ。今回は雷を再現したのである。

「先行します」

続いて飛び出したのが緋緒。少し遅れて武政だ。緋緒は式神の炎で手当たり次第敵を攻撃し、

「じゃ、俺もちょっと式神を使いますかね」

炎が逃した鬼に武政が一瞬で接近した。当然の如く、鬼は鉈を振りかざして武政を迎撃しようとした。

だがそれよりも早く、鬼の持っていた鉈が変形し、刃部分が生き物のように暴れ始め、鬼の右手に食い込んだ。

絶叫を上げながら屈んで右手を抑える鬼。そこに武政の下段からの蹴りが鬼の顔面に直撃した。

凄まじい威力の蹴りだった。鬼の首が吹き飛び、体も粒子となつて消えていく。

「武ちゃん。……その格好」

「あ、これ俺の式神の能力つす。なんつーか、今回のとちょっと同属的な感じ？」

武政の髪の隙間からは角が生えていた。笑った口元には鋭い牙。よくよく見ると細身の体系には、凄まじい高密度の筋肉が凝縮されており、手の大きさなんかは通常の一倍程になつていて。

「感情が高ぶると鬼化する式神つす。いや、これ結構使い勝手悪くて」

「無駄口叩いてる暇はないぞ。親玉が近くに居る筈だ。こいつらじや足跡が少し小さい」

既に四体の鬼を斬り殺した紅太郎が周囲を警戒しながら言つ。この短時間で比較的大きな鬼を四体。

緋緒も武政も灯も、自分達の隊長の強さに思わず言葉を飲み込んでしまつた。

そして、辺りを見回すと灯が不自然な点に気がついた。放置された列車の影を、何か白い物体が移動していた。

「突風注意報！」

灯の気象長の穂先が緑色の光を帯びた。凄まじい突風が吹き荒れ、動いていた白い物体の動きが一瞬止まつた。

それは、白い姿の鬼だつた。体も今まで倒した鬼よりずっと大きい。即座に、あのが親玉だと判断した。

存在に気づかれた白い鬼は、先ほどよりも早く。凄まじいスピードで線路の奥へと走つてしまつた。

「不味いな。この先はトンネルと繋がつてて出口があつた筈だ。あんな悪鬼が飛び出したらたまらんぞ……！」

「うなつたら応援を呼ぶしかない。と紅太郎が判断しようとした時だった。

武政が近くにあつた廃棄電車に乗り込んで、全身から銀色の光を発生させていた。それだけで車体の錆が取れ、外見だけはまるで新品のように電車が綺麗になつた。

「これで追いましょう。俺の力を使えば、車輪だつて回せます」

武政の能力である金属への命令を使う氣だ。灯と緋緒も名案だとばかりに電車に乗り込み、最後に紅太郎も笑顔を作るとそれに続いた。

「うだな。諦めるにはまだ早かつたな！」

そして、武政の能力を使用して車輪が回転し始めた。紅太郎は活刃を振るい、車両の後部を切断した。

「緋緒。灯。お前達はここから全力で炎と追い風を頼む。武政は車体の制御に力を注いでくれ」

はい、という大きな返事が響いた。緋緒は凄まじい炎を。灯は追い風を。それだけで爆発的な推進力が生まれ、

電車は凄まじいスピードでぐんぐんと線路を通過していく。その間、紅太郎は目を細めてずっと奥を睨み悪鬼を探す。

暫く黙つて見ていると、居た。線路を白い鬼の悪鬼が走つていた。

「武政。そのまま激突。お前は後ろで制御をしてくれ」

「はい！」

武政が大きく後ろに下がり、緋緒と灯も力を放出しながら衝撃に備えた。直後、電車と鬼が激突。

大きく車体が傾くが、武政が何とか操作をして体制を立て直した。だが、悪鬼はまだ生きていた。

血を流しながらも、左手で自重を支え、右手で鉈を振りかざし電車を破壊しようとする。時間がない。

と同時に、電車が地下を抜け、地上へと出た。周囲に家はない。下は海でその上に線路があるという立地。舞浜の近くだ。

これ以上は人目につくと後処理が面倒な事になる。

「使うしか、ないな」

紅太郎は右手を突き出し、意識を集中。直後、何の脈絡もなく電車の前面部が爆発し、鬼はそのまま海の方へと落ちていく。それと同時に、紅太郎も走る電車から飛び出し、空中で一瞬消えた。瞬動の力を使つたのだ。

悪鬼の近くへと接近した。活刃を手にも留まらぬ速さで振るい、悪鬼の体を切り刻み、そのまま海へと落下した。

確実に討伐しなければ、依頼達成とは言えない。海中で悪鬼が粒子となり消えていくのを確認すると、泳いで海面まで上がった。

武政が近くで電車を止めたようで、上からは緋緒が炎を噴射させて自分の事を探しているのが見えた。活刃から一発オーラを空に向けて発射。

すぐに緋緒が気づき、炎を噴射させて迎えに来た。

「師匠。お疲れ様です」

「ありがとな。しかし、初出動にしては無茶やるなあ。お前達。下手すりや始末書もんだぞ」

「その時は、始末書の書き方から」教授願います

そう言つと緋緒が笑い、つられて紅太郎も笑つた。子供に持ち上げられて部下の所に帰るのは気恥ずかしかつたが。

今日は何だか気分がいい。久しぶりに仕事で無茶をやつたからか。それとも、生真面目だと思っていたのが中々面白い部下達だからか。何にせよ、今は何を言つても格好がつかないので、紅太郎は緋緒に支えられて地面に降り立つと、駆け寄ってきた灯と武政にも笑いかけた。

「中々面白い初出動だつたよ。これからも、よろしく頼むな

案件4・悩める新入社員（前書き）

紅太郎の過去なんかもおいおい。

6月中にもう一話の更新を目指します。
更新時間は大体朝6時になりそうです。

案件4・悩める新入社員

案件4：

特殊支援課に配属されて2週間が経過していた。それと共に段々と業務もパターン化してきており、体も慣れてきた。

八神紹緒は今朝もしつかり6時に目を覚まし、軽く身だしなみを整えると、ジャージに着替えてランニングへ。

朝の舞浜は何時もの雜踏が嘘のように入人が居ない。もう少し過ぎれば学生の姿も見かけるが、今はそこまで居ない。

きつかり30分走り、シャワーを浴びて制服に着替える。

「大きい……」

制服のサイズはS。これは本来存在しないサイズであり、自分のコンプレックスの象徴でもあった。

まだ合わない袖を折り曲げて調整し、部屋を出る。隣の部屋が灯の部屋。少し離れた二つの部屋には紅太郎と武政の部屋がある。灯はとっくに目覚めている筈なので、そのまま一つの部屋の前を素通りし、特殊支援課のオフィス内へ。

「おはようござこます」

「お。緋緒ちゃんおはよつ。今日の朝」」飯はスクランブルエッグね」

「楽しみです」

「口りと笑い、冷蔵庫を開けて「緋緒専用」と書かれた牛乳パックを取り出してコップに注ぐ。

特殊支援課はキッチンと冷蔵庫は共用の物だ。食事は当番制ではなく灯が三食作っている。紅太郎の提案で、

灯一人に負担は申し訳ないので、せめて金ぐらは払おうと毎月灯に一人一万円払う事が三人一致で決まった。

月一万円でこれだけ美味しい食事ができるのなら安いものであり、緋緒自身としてはもつと払つてもいいぐらいだ。

そんなこんなで席につき、新聞を眺めていると、

「おはよつ」

大体紅太郎が次に入つてくるのだ。朝一番だといつのにしつかり身なりが整つている。

それでいて面白いのが紅太郎はそのまま冷蔵庫に行き、「美波専用」と書かれたコーラのペットボトルを取り出してコップに注ぐのだ。

変な所で子供っぽいといふか。変わつてゐる。緋緒は一面しか新聞を読まないので、ざつと眺めた後、紅太郎に渡す。

大体そのぐらいになると、武政がオフィスに入つてくる。武政は朝に弱いのか、何時も死にそうな顔で起きてくるのだ。

そして全員が揃い、

「いただきます」

各自、灯の作った朝食を堪能する。今日も素晴らしい美味しかった。素材にもこだわりを見せる灯ならではの美味さ。

「この辺りから死にそうな顔をしている武政も段々笑顔を取り戻していく。そして、大体食べ終わるのが午前八時。

このまま仮ミーティングに突入するのが日課になっていた。舞香が来るのを待つていては、業務が始まるギリギリになるからだ。キッチンの反対側に立てかけてあるホワイトボードを見ながら、紅太郎が一日の流れを説明していく。

「今日は……。武政は午前中ずっと、経済課のパソコン設定。灯も経済課に呼ばれてるな。ああ、書類の管理場所か。

今日は午後から舞浜特区内の美化清掃が入ってるからなるべく、午前中に終わらせてほしい。こんな感じで行こう。

舞香さんは今日は有給な。一日酔いだつてさつき俺の携帯にかかってきた。また合コンでからぶつたらしい」

緋緒はこの瞬間があまり好きじゃなかつた。何時も仕事が入つてるのは灯と武政だからだ。

紅太郎は紅太郎で舞香の仕事を押し付けられているらしく、あまり外に出ない。緋緒は大体その手伝いか。

舞香の暇つぶしの相手。自分個人に仕事の依頼がくるなんてのはまず無い。それがとても悔しくて、悲しい。

「じゃ、また始業時間に」

そう言つと紅太郎は食器の片づけを始めた。この食器の片付けも灯以外の当番制になつていて。今日は紅太郎の番だ。

灯と何やら談笑している紅太郎を横目で見つつ、一度自室に戻る。まだ始業時間まで一時間近くある。

武政は何か忙しそうに何処かへと歩いていった。パソコンの設定

があるという事なのでその準備かもしれない。
部屋に戻ったが特にやる事も見つからない。

「掃除は昨日もしたし……。はあ。今日もずっと中かな……」

ため息と共に、ただ時間が過ぎるのを待つしかなかつた。

始業時間になると、灯と武政はそれぞれの仕事に向かつていつた。
緋緒はやる事も特にないので。

前回の仕事の全員分の交通費の申請書類を書いていた。一枚なら
まだしも、四枚も同じ事を書くのはしんどいが仕方ない。

紅太郎は舞香が居ない分急がしそうである。電話をかけたと思つ
たら書類を書いたり、それが終わつたと思えば。

どこかの部署に緊急で呼ばれて行つてしまつた。一人は居ないと
いけないので、緋緒は留守番を命じられた。

「やつぱり、高校行けばよかつたかなあ……」

紅太郎も誰も居ないので一人でそっぽやいた。緋緒はまだ15歳だ。周囲の反対を押し切つてユニオンへと入った。

緋緒は八神家の現当主八神時雨の妹に当たる。とある理由から20以上年が離れているのであまり兄妹といった感じがしない。

むしろその双子の息子よりも年下なのだからタチが悪い。だから、いずれハ神を継ぐのはその双子の片割れか緋緒なのが、

「でも、あのクズにハ神は任せられませんしね……」

高校を卒業し、働きもせず家の金を使って相変わらず馬鹿をやつている甥っ子の事を心底軽蔑していた。

緋緒は元々地元中学から、舞浜学園高等部に進学する筈だったが、この機会に甥との差をつけようとして働きに出たのである。自分の母なんか小学校中退であるという理由で強引に押し通した結果が、この自分だけ暇な部署だ。涙が出そうになる。

しかし、くよくよしていても始まらない。自分のデスクに一度戻り、パソコンをいじる事にした。

インターネットに繋いで、特に舞浜内のニュースを見ていく。社内ミニニュースサイト何かには社員のつぶやき何かも見れる。

kaedelicious

本日の第一食堂の日替わりデザートはトラブルがあつて中止になつたそうですよー。

miki1335

【拡散希望】技術課から実験用悪鬼が逃げ出したんで皆さん対処よろしくなう。新しく出来た部署にも頼んでみようかなー。

yurikana

何か騒がしいと思つたらまた事件ですか。ウチの課長が騒ぎに混ざりうとして仕事が止まりそうです。

s e n r i - D

またヂヂの新人が訓練サボつてどこか逃げた……。例の子です。

卷二

まだ様子の良悪が分りづらいでるぜ！ 今度は娘の同級生の奥さんにセクハラしたらしい。

一通り読んで、「はあ」とため息をつき、画面を消す。誰も彼もがなんだかんだ楽しそうだった。

事件が起きて、それを解決するために走り回つて。そんな一日。初出動の日以来全く来ていない。ただ定時まで時間潰して終わり。すると、来客を知らせるベルが鳴つた。せめて受付ぐらいはしつかりやうつ。そう心に決め、

「ほんにちは。何か御用でしょうか？」

ドアを開けると背の高い女が立っていた。緋緒よりも20センチは高いだろう。セミロングの黒髪を後ろで纏め、
口には咥えタバコ。顔立ちは美人に入るが、サンダルと白衣と咥
えタバコが全て台無しにしていた。

女は緋緒に気づくと、その次に特殊支援課のオフィスをざつと眺め、中へと入った。

「今、忙しいかな？」

「はい。私以外全員出払つてまして……。私でよければお話をお聞きしますけど」

「うーん。……一つ聴いていい？　こここの若いののまとめて何て奴がやつてんの？　課長が舞香さんなのは知ってるけど」

「え。はい。美波紅太郎がやつてますけど……」

緋緒が紅太郎の名前を出した途端、女はとても楽しそうに笑つた。とても子供っぽくて、それでとても意地悪そうな笑顔だ。

女は一人でぶつぶつ咳き、新しく取り出したタバコに火をつけると、もう用はないとばかりに振り返つた。

「ちょっと依頼頼みたかったけど、それ以上に面白そうな事があるから今日はいいわ。じゃ、またね」

「あ。あの……。はい。またお待ちしております……」

とぼとぼと自分のデスクまで帰り、緋緒はまた落ち込んだ。あからさまに自分を見てから女の態度が変わつたのがわかる。

自分のような子供に、誰が依頼なんかするだろうか。　。その事実が重く压し掛かった。泣きそうになるが、何とか堪える。

「たつただいまー。あれ？　緋緒ちゃん一人？　紅太郎さんは？」

「お疲れ様です。他の課に呼ばれて出て行っちゃいました。昼までには戻るそうですが」

灯が帰ってきたので無理矢理笑顔を作つて出迎えた。

「緋緒ちゃん一人で寂しかつたでしょ。私はもう午前中終わりだから、お昼作つちゃうね。緋緒ちゃん何食べたい？」

「灯先輩の作るものでしたら何でも」

「うーん。じゃあ、暑くなつてきたし今日は冷しゃぶにでもしますか」

灯は良い先輩だ。今も少しだけ元気がないのを悟られてしまった。元気付けようと料理を作ってくれるのが嬉しい。

だからこそ、対等になりたかった。灯の負担を少しでも自分が活躍して減らしたいが、何もできないのが悔しい。

そんな気持ちを何とか押し殺して、緋緒は無理矢理笑つた。

午後からは特殊支援課全員で美化清掃の依頼をこなす。正直、しんどい仕事だが仕方が無い。

強くなってきた日差しを恨めしそうに見ながら、特殊支援課はゴミ袋を担いで舞浜特区内を歩き回っていく。

逆にこれは紺緒にとつてありがたかった。ゴミ拾いぐらいなら自分でまだ活躍できる。

率先して戦闘を歩き、ゴミを拾っていく。

「紺緒ちん張り切ってるなあ。俺も氣張りんと。ちょっと俺、向こうの方行つて来ますね」

「ああ。何なら二班に分けてやろう。灯は武政にこいつてってくれ。俺は紺緒とやるから」

「わかりました！」

灯と武政は駅方面へと走つて行き、紅太郎と紺緒は黙々と歩きながらゴミ拾いを続けた。やがて、沈黙が嫌になってきたのか、紅太郎の方から話を振つてきた。

「紺緒。そんなに張り切らなくていいぞ。これは他の課の嫌がらせの依頼だ。最近、俺達が活躍してるのが気に入らないのさ」

「……そうですか。でもいいです。仕事ですから、せっかちやります」

「何があつたのか？ 随分余裕がなさそうだが

「いえ。問題ありません。私ちょっと先に行つて拾つてます。師匠はお疲れでしようから、ゆっくりしていてください」

緋緒は紅太郎の方は振り向かず、走つて移動を始めた。午前中でスクに座つていたのは自分だけだ。

何も仕事をしてないのは自分だけだつた。だから、せめてこれぐらいは一生懸命やら無いと駄目だ。心にそう言い聞かせ、一心不乱にゴミを拾つていいく。そんな事を一時間ぐらいしただろうか。随分と遠くまで来てしまつた。

田の前には大きな施設。舞浜特区にある中高一貫教育の学校舞浜学園の校舎がある。本来、自分が今通つてる筈の場所だ。

「じゃねー」

「今日これから何処いく？」

「第一エリアに美味しいケーキ屋が出来たらしくよ」

舞浜学園の生徒達が楽しそうに下校していくのが見えた。そういうえばそろそろ学校も終わる時間だ。

友人達と楽しそうにこれから放課後を過ぐすらしい。同年代の少女達は皆、髪を手入れして、着飾つて青春を謳歌している。

緋緒は自分の薄汚れてぶかぶかの制服を見た。何故だか、とても悲しい。寂しくて、悔しくて、悲しくて、どうしようもない。

田を逸らすようにして舞浜学園から離れようとした。だが上手く

体が動かない。

「あ……れ……？」

膝をつき屈む。体がひどくかったるい。意識が重い。もつ何も考
えたくない。寒気もしてきた。

そしてそのまま緋緒はゆっくりと倒れ、同時に意識も途切れてしまつた。

田を開けると見知った天井があつた。自分の部屋らしい。何故
さつきまで仕事をしていたのに。
そこまで考えて緋緒は自分がとんでもない事をしたのだと悟つた。
一人で先行して、力尽きて倒れて。
拳句の果てにはこんな所まで運んでもらつていい。

「む。起きたか」

部屋にあつた椅子には紅太郎が腰掛け居た。ここまで運んでくれたのも紅太郎らしい。

武政と灯は違う班だったし。紅太郎と一緒に居たのは自分だけだ。恥ずかしくて、悲しくて、申し訳ない。

そんな感情が溢れ出してきて、緋緒は涙を流した。声を押し殺して紅太郎にバレまいとするが、

「緋緒。泣くな。別に怒っちゃいないから」

「すいません……。私、馬鹿で……。役立たずで……」

「そんな事はない」

「私戦うしか能がないから。……」この課に居ると先輩方に迷惑かけてばかりで……

涙声で鼻をすすりながらそう言つて居ると、紅太郎は立ち上がりて緋緒の頭にぽんと手を置いて撫でてやつた。
よく父親と母親に寝る前にしてもらっていた事だ。それが気持ちよくて、紅太郎の優しさが申し訳なかつた。

「俺の責任だ。部下の体調管理不足。部下の悩みに気づかず放置した結果がこのザマだ。緋緒。お前は悪くない」

「でも。私は何も出来ないです」

「お前は率先してお茶とコーヒーを淹れてくれるし、事務所内の掃除も完璧だ。正直、俺が前居た職場にお前が欲しかつた。

人間が住むには最低の環境だったな、アレは。でも今の特殊支援課は居心地がいい。それは間違いない、お前のお陰だ」

「いいですよ……無理に褒めなくて」

緋緒の意思是堅い。元々真面目な性格なので紅太郎は少しだけ羨ましかった。しかし、このままではよくない。

こんな事は一度と起こしたくない。自分の為にも。そして、何より緋緒の為にも。

「ちょっと待つて」

それだけ言つと、紅太郎は一度部屋を出て行き、十分ぐらい経つただろうか。緋緒の気持ちもようやく落ち着いてきた頃に紅太郎は再び戻ってきた。その手には、分厚い封筒が幾つも抱えられている。それを緋緒のベッドの上に置く。

「何ですか、これ？」

「俺が今まで書いた始末書だ。転勤の際、上司が保管してるので知つてたから日本に帰るついでに貰つてきた。無許可でな」

緋緒には信じられなかつた。あの優秀で何でもこなせる紅太郎がこれ程の量の始末書を書いたとは考えにくい。

紅太郎は少しだけ照れくさそうにそっぽを向いている。緋緒は封筒の中から一枚の書類を取り出し、読んで見た。

「…………風呂覗きですか」

「よ、よろしくおつてとんでもないのを引いたな。これ、ちなみに

俺が18歳の頃に書いた奴な

他にも取り出してパラパラと眺めて見る。暴走行為。命令違反。法律違反。重いのから馬鹿なのまで多種多様にある。

「お前は俺を凄い奴だと思ってるみたいだが、俺はお前ぐらいの年の頃はそりや酷いもんだった。

上司に殴りかかってボコボコにされたり、先輩達につつかかってボコボコにされたりな。今思えばよく死ななかつたよ俺」

「意外です……」

「人間蓋をあけりやそんなもんだ。だから緋緒。お前は無理しなくていい。お前は今出来る事を一生懸命やつてくれ。

今年入つたばかりで、しかも15歳のお前にいきなり仕事を任すのは無理だ。ゆっくり時間をかけてやればいい。人生はまだまだ長いから

「……でも。先輩達に迷惑が……」

「迷惑なんか幾らでもかける。問題起こして舞香さんにせめて給料分は仕事させるのも、下つ端の仕事なんだぜ。俺はお前が真面目な子だつて知つててる。だから、俺が幾らでもフオローしてやるから。今日みたいな無茶はもうするなよ。灯と武政なんか顔が真っ青になつてたぞ。緋緒がちょっとおかしいのに気づけなかつたつて後悔している」

「そんな……」

「皆お前が一生懸命だつてわかってる。だから、こうして心配して

いの

「…………はい。わかりました」

「わかつたならいい。もう少し寝ていろ。後一時間もすれば緋眼使
いなら全快するだろ。そしたら、灯の特製料理が待ってるからな」

「ええ。楽しみにしています。それと、本当にありがとうございます
した」

それだけ言うと紅太郎は手を振つて部屋から出て行つた。後に残
された緋緒は静かな達成感と、熱を感じた。

紅太郎に撫でられただけでとても体が温かくなつた。緋緒は撫で
られた部分を自分で触り、感触を確かめる。

「へへっ」

今までの暗い表情が嘘のように明るくなつたのは緋緒自身にもま
だ理解できていなかつた。

案件5・怒れる新入社員（前書き）

お久しぶりです。
また投稿再開できます。

「それでは、再会を祝して、かんぱーい！」

和風な装いの居酒屋チヨーンに一際若い声が響き渡つた。それもその筈、その場の半が未成年。

男女混合で30人ぐらいであろうか、ビールのジョッキを掲げ何が楽しいのか笑いながら乾杯を何度もしている。

そんな同級生達を、金剛武政は何処か一步引いたような視線で見ていた。今日は、武政の高校時代の同窓会だった。つい一ヶ月程前に卒業したばかりなのに同窓会とは笑いがこみ上げてくる。

大人のように背伸びがしたいのか、ビールを早速あおる男の同級生達。女の同級生もバツチリ化粧をしていて初任給で買ったであろう、高いブランド品をぶら下げている。

そんな同級生達を見て、武政は少し呆れたが、自分がもう学生じゃないという実感も湧いてきて少しだけ大人になつたような錯覚が起きた。

すなわち、同級生達は皆この錯覚に酔つているのだろう。まだ入社して3ヶ月もたたない新人なのにだ。

「ウチの課マジきちいよ。今月の残業25時間だぜ」

「それならまだいいさ。俺なんか」「

「あ。そのブランドのバッグどうしたの？」

「初任給で買っちゃったー」

いい気なもんだ。まだ役に立つ程の仕事もしていないのに。このクラスで一番成績がよく、首席で卒業した武政ですら役に立つたという実感がないのに。

とまで考えて、自分がクラスメイト達をいかに見下していたかを唐突に理解した。だが、それでいい。元々気の合う奴なんて居なかつた。

今日は壁の模様と同化して、適当に飲んで食べてさっさと帰つて明日の準備をしよう。

そんな事を考えていると、田の前に誰かがどっかりと座つた。顔を上げると、見知った同級生の顔。

顔立ちがとてもよく。武政と同じくらいの長身。ビールを片手に持つてニヤニヤ笑いを浮かべていた。

「よお。金剛。久しぶりだな」

「久しぶり。弥栄」

嫌な相手だと武政は内心がっかりした。この弥栄慶介といつ男の事はあまり好きじゃなかつた。

要領がいいタイプで、人の間を上手く立ち回り一番美味しい所を持つていくというハイエナみたいな男である。

何か自分の事が気に入らないのか、在学中何度か喧嘩を売られた事がある。当時は、武政の仲良くなっていた先輩がすぐ首をつっこんできたので

これといって武政に害はなかつたのだが、その先輩は今はいない。きっと嫌な事を言ってくるんだろうな、と予想していると弥栄が口を開いた。

「なあ、金剛。お前の課にわ

」

「意外だつたと言えば意外かな。まさか武ちゃんがねえ……」

「すいません。灯さん」

翌日。朝から特殊支援課のオフィスで朝から武政は灯に頭を下げた。武政の顔には無数の湿布や絆創膏が張つてあり、青痣も残っている。

昨晚の事を思い出すだけで頭が痛い。あれから弥栄と揉めたまでは”まだ”良かった。些細な事から口論になり、どちらも引けなくなつた。

先に手を出したのは武政だ。流石に流せない一言を言われた。それは弥栄も読んでいたようで、武政の一撃を器用にいなすと、今度は周囲を味方につけようとした。

ムカつくが、実力はかなりあるのだ。正直、戦闘だけなら互角ぐらいであろう。しかし、味方をつけられては流石に武政も勝ち目がない。

弥栄が周囲を巻き込み、小規模ながら乱戦状態になつた。それがいけなかつた。誰かが投げた複数の酒瓶がとある席に直撃した。

「怪我は大丈夫？ しかし武ちゃんがそこまでやられるつてのも珍しいね」

「悪魔のような強さでした。アレは」

怒り猛ったその席の三人のおっさん達が喧嘩をしていた武政達に襲い掛かってきたのだ。

やけにガタイのいいおっさん達だった。それでいて生身で凄まじい戦闘力を誇った。武政のクラスはかなり優秀なクラスで卒業後の進路はユニオンの戦闘系や家業を継いだ人間が多い。つまり現役だ。

それなのにもまるで子供をあしらうように武政達の攻撃はかわされ一方的に殴られ、最後はユニオンの戦闘3課が出張つてくる始末だった。

結局、武政は運ばれた病院で身元がバレてしまい、昨晩は灯に迎えに来てもらつたというわけだ。

「それにしても、紅太郎さんが出張中でよかつたね。でも、帰つてきたらちゃんと報告するからね」

「はい。それはわかつてます」

実の所それが一番不安だった。この課に配属されて約2ヶ月。ほぼ毎日紅太郎と会つてわかつたのが、とても有能なリーダーだと言う事。

少し前の緋緒の件にしても、それ以外の件にしても紅太郎は非常に頼りがいのある人間だった。

何時か追いつきたい。とまでの憧れも実はある。だが、当の紅太郎はのらりくらりと自分の手柄を自分達部下の手柄にしたがる。もつと欲を出せばいいのにと、偶に思つぐらいだ。そんな紅太郎

がこの件を知つたらどう思うだろうか。

未成年の分際で酒に酔つて喧嘩して、あげくの果てには見知らぬおっさんに殴られて病院送り。

考えるだけで嫌になってきた。そんな武政の心情を察したのか、

灯もポンと優しく肩を叩いてくれた。

「大丈夫だつて。私達だつて少しはフォロー入れるから。ね、緋緒ちゃん」

「あ、はい。その……武政先輩。一つお聞きしたいんですけど」

割烹着を着て舞香の机を丹念に拭きながら話を聞いていた緋緒が質問を投げかけた。

珍しく歯切れが悪そうだ。何かと思つて先を促した。

「その武政先輩を殴つた人達つて三人組のおじさまですよね。四人目は居なかつたんですね？」

「ん。 そうだよ。三人だつた」

「そ、そうですか。良かつた……」

何やら納得したようにうんうんと頷く緋緒。意味がわからないので、武政はそのまま流す事にした。

問題は山積みである。それに、武政が予想した通りならこの後

「ちわつす。お邪魔しますよ、と」

乱暴に特殊支援課のオフィスのドアが開けられ、屈強な男達が数人入ってきた。

全員身のこなしに隙がない。服の上からでも肉体が鍛え上げられているのもよくわかる。

さつと全体の反応を伺つ。灯は警戒心を強めた表情で動向を見守り、緋緒は掃除を続けながらも、持つていた埃はたきが大型ナイフに変わっていた。

（流石は八神……）

どこか場違いな感想を抱いていると、顔中包帯まみれの弥栄。その後ろから細身の男が現れた。

「はじめまして。ユニオン戦闘一課。柴崎新次郎と言います。金剛武政君は、君ですね？」

細身の男 柴崎が細い目で武政の事を見た。やはり、と思いつと同時弥栄の先輩なのだろうと判断。心を落ち着けて会話に応じた。

「はじめまして。金剛武政です。何か御用でしょうか？」

「ええ。昨晩君が起こしたウチの弥栄君との一件の事で少し。金剛君。君から手を出したというのは本当でしょうか？」

「そうですね。侮辱に近い言葉を浴びせられましたので。今は反省しています。申し訳ありませんでした」

「いや、それはいいんですよ。ただね……我々は戦闘一課です。ユニオンで一番重要な部署です。

その期待の新人がね。特殊支援課なんて新しい部署の新人の小僧に痛めつけられたなんて噂が流れ

ますと、業務の方に支障が出てしまつんですよ。ところが、もう出てるんですよ」

武政は柴崎の言葉を聞きながら冷静に柴崎の拳動の観察をしていた。口調こそ冷静なもの、先ほどからポケットに入れた拳は外に出さないし、小刻みに足先が揺れている。

元々気性の荒い人間が年を経て隠し方を覚えたような印象だ。そこまで理解して、武政は笑つた。

「つまり。俺と弥栄が勝負して俺に負けると。負けないと、後ろのお兄さん達が何をするかわからないと」

一瞬だけ柴崎の顔に動搖が出たのを武政は見逃さなかつた。カマかけで言つてみたが正解だ。

つまりは、ただの戦闘バカ。しかも面子にこだわるクソ野郎。ユーモンも墮ちたものだと内心笑つた。

「やつは言つてません。ただ、世の中何が起こるやらと言つたところでしょうね」

緊張した空気がオフィス内に立ち込めた。灯が何か抗議しようとしていたが、緋緒が視線で止めた。

良い判断だと思う。この場で乱戦になつたら明らかに灯を抱えたこちらが不利だ。

たとえ、武政が”時間さえあれば皆殺しにできるような相手”でもだ。すると

「あー？ 何なのこれ？ むさこのがいっぱい汗臭いわ。初夏の良い空気が台無しー」

声と同時に酒臭い匂い。五月舞香がようやくの出勤を見せた。今日は機嫌が悪いようだと特殊支援課の面々は悟った。だが、戦闘一課はわからなかつたようで、

「あんたもここの人？ 今、ちょっと話してんだから黙つてくれんねーかな？」

一人が舞香を睨み付け、威圧するよつに言つた。その瞬間、柴崎の顔が青ざめ、

「馬鹿！ その人は」

そう怒鳴るが既に遅かつた。舞香がめんざくせつに指を一度パチンと鳴らす。

それだけで轟音が響き渡り、戦闘一課の数名の体が嫌な音を立て軋んだ。絶叫と共に、のたちまわる男達。

「！」は私のオフィス。私の城。私より威張つた奴はぶつ殺すわよ！」

のたちまわる男達を蹴り回す舞香。まさに悪魔の所業である。柴崎は青ざめた顔を愛想笑いに変え、

「申し訳ありません。ウチの部下の態度が悪くて。教育しておきますので、今回は何卒ご容赦を」

「アンタ。戦闘一課の柴崎よね。何？ ウチに何か依頼にきたの？ だったら、アンタんとこの

課長の弱みでも握ってきたんでしょうね。もし今更ないとか言つた

ら、腰の骨碎くわよ

「い、いえ。ウチの弥栄とそちらの金剛君が昨晩喧嘩したよつでしてね。今回は事情を聞きに」

そこまで言つと、舞香の顔が楽しそうに笑つた。目が爛々と輝き、これ以上なく楽しそうだった。

「武政やるじやん。いいわ、喧嘩ぐらこじやんじやんやんなさい。あ、どうせだからこりつしましょつ。

ウチの武政が勝つたら、アンタんとこの予算の5パーセントを毎月ウチにまわしなさい。

万が一ないと思つけど、武政が負けたらアンタんとこに武政上げるわ。五行の直系よ。アンタんとこのボスが喉から手が出るほど欲しがつてた人材だからねえ。間違いなくアンタ出世するわよ」

青い顔をしていた柴崎だが、それを聞くと不適に笑つて了承の意思を見せた。

よつほど自信があるのだりつ。逆に弥栄の方は緊張したよつで、表情がこわばつている。

「じゃ、ひとつともむそい連中連れて帰んなさい。臭くて死にそうだわ」

最後の最後まで毒を吐いて、舞香は一課の人間たちを見送ると、ドアを閉めて武政を見て笑つた。

「いいわ。いいわよ武政。揉め事は歓迎するわ。5人ほど闘討ちして、3人に脅迫かけてまでアンタを採つた甲斐があるつてもんよ

「課長。何時か刺されますよ……」

武政がげんなりとした顔で言つと、今度は灯が大きな声を上げて抗議を示した。

「課長。何でそんな可哀想な事を言つんですか。相手は戦闘一課なんですよ。あの様子じゃ、面子を保つためにまず負けるような戦いはしてきませんし。

昨日だって、武ちゃんがあの子を殴つた理由だって――！」

「いいんです。灯さん。今回は俺の戦いですから。俺が全部ケジメをつけてきます」

そういえば灯には話してしまつたんだと内心後悔しながら、武政は灯の言葉を遮つた。

その言葉を聞くと、舞香は満足そうに笑い、

「武政。特殊支援課はどう？ 気に入った？ それとも、一課の方が良かつた？」

舞香の質問に対し、武政は考えた。この一ヶ月と少しひらい、自分が何をしてきたかを。

親と兄弟に絶望し、抜け殻のようだつた武政の心に灯つた光の事を。誰も信じない。過去にそう決めた。

そんな自分が同じアパートで同僚と暮らしながら日々を過ごしてい。少し前までの自分ならそんな風になるとは思わなかつた。そして、目標も見つけた。

「俺は、特殊支援課がいいです」

「なら勝つべきなさい。自分の居場所は、自分で勝ち取つて初めて自分の物になるのよ」

その言葉だけで、舞香は自分の事を見抜いているのだと武政は思つた。どうしようもな酔っ払いだが、流石に管理職で名家出身なだけあって有能だ。

「わかりました。必ず勝ちます」

「ならいいわ。後の処理は任せなさい」

定時を迎へ、勤務時間が終了した。武政は特殊支援課のオフィスではなく、ユーロン本部の訓練部屋に居た。

戦闘服に着替え、ウォームアップも既に終了し、何時でも戦闘に入れる体になつてゐる。

周囲に居るのは昼間特殊支援課に来た面々ばかり。どうやら、一課のこの一部の人間だけの話になつてゐるようだと判断した。

即ち、不正やりたい放題。最悪全員と戦う事も考慮しておく事に決めた。

（流石にきちいかな……）

相手は腐つても戦闘一課。ユニオンでも選ばれた人間しか入れない部署だ。流石にこの人数相手は厳しい。

既に弥栄の方も準備が整つているようで、臨戦態勢に入っている。武政は軽くグローブを握り、構えをとつた。

同時に外野から野次が飛び始める。アウェーなので当然といえば当然だが、少しだけ頭に血が上つた。

「金剛お前、暫く口きけないようにしてやるぜ」

「安心しろ。俺は一生お前と口をきく氣はないよ。アホが感染るからね」

開始のゴングも何もなく、弥栄が武政目掛けて突っ込んできた。弥栄の式神は氷を使う能力だ。

触れたものを凍らせる能力。それを利用しての攻撃は大体学生時代に知つてゐる。後はユニオンに入つてお互ひどれだけ成長したかだ。

「つらあ！」

鋭い拳の一撃。早かつた。確実に学生時代より力が増している。そのままステップをしての連続攻撃。武政は何とかそれをギリギリで避けていく。相手が相手なので、金剛家の力は大きなアドバンテージにはならない。

武政はゆつくりと呼吸を整え、少しずつ式神の力を挙げて体を鬼に近づけていく。やがて、頭に角が生えた頃、

「今度はこつちの番！」

周囲から微量な金属を集中させ、拳一体に纏わせると、体を捻つ

た渾身のパンチを繰り出した。

式神の力によって増幅された力と鋼鉄の拳だ。当たつたら大怪我ではすまない。だが、弥栄も成長していくようでは拳は中を切つた。

少し距離が離れ、弥栄は周囲の水分を全て凍らせ、巨大な氷柱を作り上げた。この大きさは流石に大きい。

武政は冷静に拳で迎え撃ち、氷が鋼鉄の拳を受けて粉々に砕け散つた。

「かかつたな！」

次の瞬間、割れた氷が全て小さな氷の刃と化し、武政の体へと突き刺さつた。金属は無効化できるが、氷の刃は流石に無効化できない。全身を切り刻まれ、武政の体の様々な部位が出血。

式神の効果によりすぐに傷口は塞がるが、血は残り、武政の切れた額から流れ出した血が目に入ったのか武政が目を擦つた。

「とじめだ！」

弥栄が手を巨大な氷塊にし、武政の頭を砕こうと振り上げた。大振りだが、比例して威力のある一撃。

「見えないよう、見えたか？」

次の瞬間。武政が目を見開いて笑つた。流血したのは事実だが、目に入ったふりをしていたのだ。

その大降りになつた一撃にカウンターを見舞う事は、身体能力が強化されている武政にはとても簡単な事だつた。

轟音と共に、弥栄の顔面を武政の拳が振りぬいた。体がバウンドし、人形のように吹つ飛び、弥栄は壁に叩きつけられるとそのまま動かなくなる。

「俺の勝ちだ！」

そう声を上げたのもつかの間、周囲の空気がシンとなっており、悪意と敵意と殺氣がむき出しになつていて。

予想通り、全員を相手にしなければならないようだつた。意外と弥栄も強かつたので、実を言つと、勝算なんてほぼ無いに等しい。それでも負けたくなかつた。舞香にあそこまで買われていたのだ、おめおめと負けるわけにはいかない。

そして、特殊支援課を抜けたくなかつた。最後まで意地を通す。そう思い、式神を抜いた一課の面々目掛けて走つていこうとするべく、

「む。終わつてしまつたか」

訓練施設のドアが開き、美並紅太郎がスース姿のまま入つてきた。同時に、全員の動きが止まつた。

式神を慌ててしまい、その場に居た全員が下を俯き、紅太郎を見ないようになつた。全員の顔に浮かんでいる感情は恐怖。

それを知つてか知らずか、紅太郎は何時も通りこちらまで歩いてきた。

「どうやら武政の勝けりしいが……。なあ、柴崎。結局その辺りはどうなんだ?」

「は、はい！ 金剛君の勝ちです！ 私達一課の敗北です！」

「ならもう夜も遅いし、武政を連れて帰つてもいいか？」

「ど、どうぞ…」

柴崎は完全に怯えきっていた。他の面々も大体似た様な感じである。紅太郎は気にせず、武政の所までたどり着くと、

「もう血は止まってるな。帰るぞ」

それだけ短く言い、後ろを向いて歩いて行く。慌てて武政も追いかけて訓練室を一緒に出た。

「シャワーは事務所帰つてから浴びる。明日戦闘服使うからな。こゝにおいてつたら面倒だ」

「はい……。紅太郎さん。もう全部ご存知で？」

「ああ、知つてるぞ。灯から全部聞いた。酔つ払つて喧嘩した事。一課の連中に絡まれた事。

正直、俺が出張中に何をしているんだと少し腹が立つてゐる」

「すいません……。全部、自分が悪いです」

それだけ言つと、紅太郎は武政と並んで黙々と歩き続けた。どうやら本当に怒つてゐるらしい。

失望されてしまったかもしれない。武政の心が落ち込んで行く。とぼとぼと隣を歩き続け、

ようやくコニオン本部を出た所で、紅太郎は口を開いた。

「それにしてもまあ、良くなつた。あの生意気な一課の連中の鼻つ柱を追つてやつたんだ。当分、これででかい顔ができるな」

気がつけば紅太郎の顔がニヤついていた。さつきまでとはまるで別人な、何時もといえば何時もな感じの美並紅太郎だ。

「怒つてないんですか？」

「本部の中だつたからな。誰がどこで聞き耳を立ててるかわからん。ここならもう大丈夫だろ。」

ただな。あんまり他の部署に喧嘩を売るのはあんまよろしくない。他の部署行つた時、困るだ」

「わかりました……」

そこまで言つて紅太郎は一息つくと、近くの自動販売機で酒を一本買ひ、一本を武政に投げ渡した。

「それとな。俺の悪口を言われたからつて怒らなくてもいい。」つい見えて、結構敵が多いんだ」

どうやら灯に喋られてしまつたようだ。武政は少し恥ずかしくなつて、下を向いた。

昨晩武政はこう言われたのだ。「お前の課に一人戦場から逃げた腰抜けリーダーが居るだろ?」と。

どういう事なのかはさっぱりわからなかつた。ただ、紅太郎の事を言つてるのは理解できた。

あの美並紅太郎が腰抜け呼ばわり。しかも自分の同級生に。気がつけば、殴つっていた。どうしようもなく腹が立つたのだ。

「紅太郎さんは、腰ぬけなんかじゃないつす

「昔はどうかわからんぞ?」

「それでも、今は腰抜けじゃないつす

」の一ヶ月と少し。紅太郎と接してきた武政の素直な感情だ。それを察したのか、紅太郎も困ったように空を見上げた。

少しだけ悲しそうな目をしている。直感的にそんな感想を抱いた。だが、それもすぐに消えた。

暫く黙った後、紅太郎はぼそりと呟いた。

「昔な。俺がまだお前ぐらいだった頃、俺の居た部隊が壊滅した事がある。その時の話だろ？」

それだけ言つともう何も喋る気はないらしい。沈黙だけが場を支配した。

どれぐらい時間が経つたろうか、武政が何も言えないでいると、紅太郎は時計を見た。

「そろそろ出前が届くかもしれんから帰るか。お前の勝利記念パーティーだそうだ」

「出前……ですか。灯さんが作ってくれないって珍しいっすね」

「ああ、灯は今忙しいだろうからな。もう少しすれば終わるだろ？ けど、様子見に行くか？」

「え……灯さん何をやつてるんですか？」

武政がそう聞くと、紅太郎は一ヤリと笑いながら言った。

「舞香さんに命令されて、ガラ空き状態の一課のオフィスで不正経理の証拠探しをしてるよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3608s/>

SDFS 特殊支援課

2011年10月3日06時16分発行